

「海フェスタ東三河」における広報活動について

坂井博¹・生田貴司²・豊田裕史²

¹名古屋港湾空港技術調査事務所 総務課（〒457-0833 愛知県名古屋市南区東又兵ヱ町1丁目57-3）

²三河港湾事務所 総務課（〒441-8075 豊橋市神野ふ頭町1番地1）

中部地方整備局では、平成28年に開催された「海フェスタ東三河」に参加し、パネル展示や実験装置の体験、中部地方整備局に所属する船舶の一般公開などを通じて、社会資本の役割について広報活動を行った。その結果、体験型の出展を効果的に利用することで、中部地方整備局が実施する港湾整備事業に対して、大勢の方の理解を得ることが出来た。

キーワード：港湾事業、三河港、広報活動

1. はじめに

中部地方整備局港湾空港部では、安全で質が高く、そして環境と共生した港湾・海岸・空港の整備を行い、国内外の物流を支える港湾機能の強化や、物流の迅速化など、さまざまな施策を行っている。

また、こうした取り組みに対する理解と協力を獲得し、円滑な事業進捗を図ることを目的として、広報活動を行っている。当局は、その広報活動の一環として、平成28年に開催された「海フェスタ東三河」に参加した。

本論文は、「海フェスタ東三河」における当局の広報活動の内容や活動の結果得られた成果等について報告を行うものである。

2. 「海フェスタ東三河」の概要について

(1) 「海フェスタ」とは

「海フェスタ」は、「海の恩恵に感謝し、海洋国日本の繁栄を願う日」という「海の日」本来の意義を再認識し、海に親しむ環境づくりを進め、広く国民の海に対する関心を喚起するとともに地域観光振興による交流人口の増加を図り、地域の活性化を図ることを目的とし、毎年、海にゆかりのある自治体で開催されている。このイベントは、昭和61年から「海の祭典」として行われており、平成15年から「海の日」が国民の祝日として7月の第3月曜日となり3連休化されたことを契機として、同年か

ら「海フェスタ」に改称して開催されている。

(2) 「海フェスタ東三河」の概要

平成28年の「海フェスタ」は、愛知県の三河港を中心として、三河湾の沿岸および豊川の流域に位置する東三河地域5市2町1村（豊橋市、豊川市、蒲郡市、新城市、田原市、設楽町、東栄町、豊根村）において、7月16日（土）から7月31日（日）までの16日間にわたり開催された。



図-1 開催地

三河港は、日本のほぼ中心に位置し、古くから東三河、西遠及び南信地域の物流拠点として、また東三河地区の工業開発の中核として重要な役割を果たしてきた。中でも、モノづくり愛知県を代表する自動車産業が集積して

おり、我が国を代表する自動車流通の拠点港湾として重要な役割を担っている。開催期間中には、記念式典・祝賀会をはじめとし、海の総合展、練習帆船や大型船の一般公開・体験乗船、海産物を主とした食のイベント、海洋教育関連イベントなどが開催された。

3. 広報の内容について

「海フェスタ東三河」の開催期間中、中部地方整備局では「海の総合展」にブースを出展した。また、「船の一般公開」では、中部地方整備局名古屋港湾事務所に所属する浚渫兼油回収船「清龍丸」、海洋環境整備船「白龍」の一般公開を行った。

(1) 「海の総合展」での取り組み

「海の総合展」とは、「海フェスタ東三河」のメイン事業として、三河湾・東三河地域の歴史、自然、環境等のすばらしさを、次世代に引き継ぎ広く知ってもらうため、さまざまな形で展示や紹介を行うものである。また、港や河川の役割や仕事、観光、自然、海洋環境、スポーツ、文化などの様々なテーマによるセミナーや、関連施設の見学ツアー等を開催し、これらを通じて、東三河地域の魅力を全国に発信し、地域の活性化に繋げる契機とし、海からの恩恵と魅力に対する理解を促すためのイベントとして構成されている。

当局では、「海につながる社会資本の役割と東三河の環境」をテーマに、模型及びパネル展示にて社会資本の役割と東三河の環境を紹介した。

a) 岸壁模型

三河港には、メルセデス・ベンツをはじめ多数の海外自動車メーカーが豊橋市の神野地区に立地しており、岸壁や名豊道路の整備をはじめとする社会資本の整備等により、国内最大の自動車輸入拠点港に成長した。その結果、三河港における完成自動車の輸入台数および輸入金額はともに24年連続日本一（平成28年末時点）となっており、自動車輸入拠点港として重要な役割を担っている。

現在、三河港湾事務所では、完成自動車等の取扱貨物需要の増加及び船舶の大型化に対応するとともに、災害時における背後圏の緊急物資輸送に加え、地域経済を支える幹線物流の継続性を担保するため、神野西ふ頭地区において耐震強化岸壁（水深12m）の整備を進めている。このような三河港の特徴や中部地方整備局の取り組みをパネルで紹介するとともに、表面的には見ることができない土中構造等について岸壁の模型（横浜港湾空港技術調査事務所から借用した模型を加工して展示）を用いて紹介した。



写真－1 岸壁模型

b) 干潟水槽

三河湾は、その奥行きに対して湾口が知多半島と渥美半島により非常に狭くなっている閉鎖性水域である。また、三河湾へ流入する大きな河川は豊川と矢作川の2本しかなく、海水を湾外へ押し出す力が弱く海水交換が行われにくいのが特徴である。そのため、三河湾では水質の富栄養化による環境悪化が問題となっており、その改善対策が求められていた。

そこで、中部地方整備局と愛知県が連携し、平成11年度から平成16年度にかけて、中山水道航路の浚渫工事の際に発生した良質な浚渫砂を活用し、干潟・浅場造成や覆砂を行い、三河湾の自然の浄化作用を取り戻そうとする世界的に例のない海域環境創造・自然再生事業（シーブルー事業）を行った。

本事業により、三河湾内に約620haの干潟・浅場等が造成され、造成した干潟では海の水質浄化にとって大きな役割を担う二枚貝をはじめとする底生生物が増加し、三河湾の水質改善に大きく貢献した。

本展示では、三河湾の環境や環境改善に対する中部地方整備局の取り組みを紹介するとともに、三河湾の干潟に棲息する生物を放流した干潟水槽（名古屋港湾空港技術調査事務所から借用）を設置し、三河湾の干潟及び干潟の生物に触れる、体験型の展示とした。

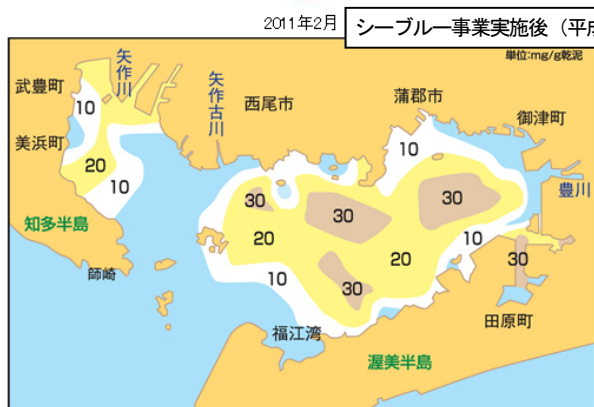
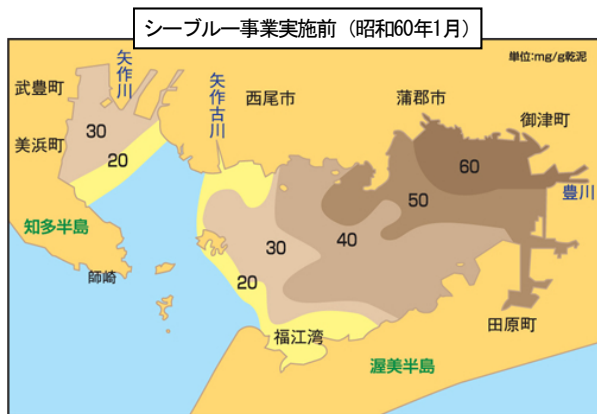


図-2 シーブルー事業の効果
(事業実施前後の海底土砂COD分布状況)

安政東海地震（1854年）が発生し、地震と地震との間隔は100～150年である。こうした現状をパネルで紹介し、注意喚起を行った。

また、東日本大震災で津波被害にあった釜石港では、釜石港に設置されていた世界最大水深の防波堤が「無かった場合」の津波被害をシミュレーションで再現し、防波堤が津波の到達時間を6分遅らせ、津波高を4割、遡上高を5割低減させていたことが明らかにされた。そこで、防波堤の津波低減効果を視覚的に体験してもらうため、津波実験装置（名古屋港湾空港技術調査事務所から借用）によるデモンストレーションを行った。津波実験では、防波堤を設置する場合と設置しない場合の2ケースで津波を発生させ、津波がどこまで遡上するかを比較することにより、具体的な効果を擬似的に再現した。

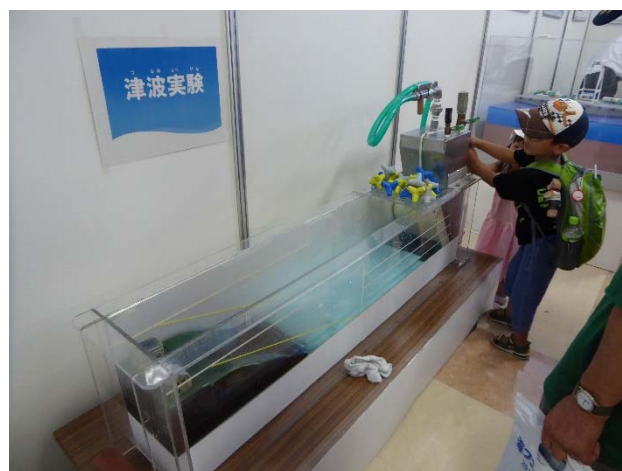


写真-3 津波実験装置



写真-2 干潟水槽での触れ合い体験

c) 津波実験

東三河地域は南海トラフ巨大地震や巨大台風による高潮被害が危惧されている。過去2,000年間に宮城県・岩手県の沿岸域でM8以上の地震が発生したケースを確認すると、地震発生前後の10年以内にM8クラスの地震が、首都圏や西日本で発生している。また、最近500年間で東海地震が発生している時期を確認すると明応地震（1498年）、慶長地震（1605年）、宝永地震（1707年）、

d) 消波ブロック模型製作

消波ブロックは、沿岸域において、台風や爆弾低気圧に伴って発生する波の威力を弱め、港や海岸を守っている。本製作体験は、実際の消波ブロックとほぼ同様の手順で、コンクリートの代わりに石膏を使用し、消波ブロックのミニチュア製作をとおして消波ブロックの役割について理解を深めてもらう展示とした。



写真-4 ブロック製作体験

(2) 船の一般公開

「海フェスタ東三河」には、海上自衛隊の護衛艦「こんごう」や（独法）海技教育機構の練習帆船「海王丸」など、多くの船が入港した。そのうち、中部地方整備局名古屋港湾事務所に所属する浚渫兼油回収船「清龍丸」が7月23日（土）から7月24日（日）に、海洋環境整備船「白龍」が7月30日（土）から7月31日（日）にそれぞれ神野東ふ頭地区3号岸壁に入港した。

a) 浚渫兼油回収船「清龍丸」

船の一般公開に先駆け、「海の総合展」でパネル展示を用いて、「清龍丸」の役割を説明した。「清龍丸」は、通常時は浚渫作業を行い、大規模な油流出事故発生時には油回収作業を行う船舶である。また、平成28年4月14日に発生した熊本地震においては、被災地に水、食料、毛布等の支援物資を届けるとともに、給水、入浴、軽食、携帯電話充電等の支援を行っており、この支援活動をパネルに展示し紹介した。

一般公開では、「清龍丸」の乗組員を広い船内の各所に配置し、見学者の事故防止や熱中症などによる体調変化に配慮した上で、丁寧な説明を行った。また、最上部にあるコンパスデッキからは双眼鏡を使って三河港の様子なども見学してもらった。



写真-5 浚渫兼油回収船「清龍丸」の一般公開

b) 海洋環境整備船「白龍」

「白龍」は、伊勢湾内及び三河湾内の航行船舶の安全と環境保全を図るため、海面に浮遊する流木やゴミ等を回収し、油流出事故発生時には油回収作業を行う船舶である。また、伊勢湾及び三河湾の環境モニタリングも行っている。「海の総合展」では、「白龍」の役割についてパネル展示で説明を行った。

一般公開では、見学者から、どんなゴミが漂流しているのか、どのくらいの量のゴミを回収するのかなどを熱心に質問する様子が見られた。



写真-6 海洋環境整備船「白龍」の一般公開

4. 広報の成果

16日間にわたる「海フェスタ東三河」での広報活動に参加し、以下の3点について成果を挙げられたと考えている。

1点目は、大勢の方に港について興味を持ってもらえたことである。海フェスタ東三河実行委員会の発表では、「海フェスタ東三河」の来場者数は1,463,013人とされている。そのうち、「海の総合展」や船の一般公開を行った豊橋市神野ふ頭町への来場者数は404,143人である。このように大勢の方に三河港や三河湾の特色や取り組みを紹介することができたのは大きな成果であったと考えられる。

また、「清龍丸」の一般公開には2,938人、「白龍」の一般公開には3,206人の方が来場し、「白龍」では過去の最多見学者数を大幅に更新した。普段、一般の方の目にふれる機会の少ない作業船を大勢の方に公開し、それぞれの船の特徴や役割について紹介することで、中部地方整備局が実施する事業への理解につながったと考えている。

2点目は、体験型の出展を効果的に利用した広報活動を行うことができた点である。今回の出展では、多くの方が模型や実験装置に関心を示し、説明を行う機会が多かった。また、港湾について知識がない方に対して、実際に体験することで、港湾について興味を持ってもらうきっかけを作ることができたと考えている。

一方で、体験型の出展では改善点も見受けられた。消波ブロックの製作体験では、当初、来場者にすべての製作作業を体験してもらっていたが、消波ブロックがうまく完成しないことがあった。出展の後半には、重要な作業をスタッフが手助けすることで問題は解消したが、一般の方に体験してもらうことを重要視しすぎて、体験を成功させることができなかった点は、今後の広報活動で改善すべき点である。

3点目は、中部地方整備局港湾空港部全体の事業に係る広報活動ができたことである。従来のイベントでは、三河港に焦点を絞って広報活動を行っていたが、今回の出展では、三河港に限らず、港湾施設の役割や海の環境などについて広く紹介を行い、理解を得ることができた。また、港の説明を中心に行いながらも、物流ネットワークの発展に欠かせない道路の紹介や、豊橋河川事務所が作成したパネルを用いて、人々の生活や地域の産業の発展に貢献する河川についても紹介を行い、中部地方整備局全体の事業についても理解を得ることができたと考えている。

5. 結び

今回の「海フェスタ東三河」では、大勢の方に港湾について興味を持ってもらうことができたと感じている。また、人々の生命や財産を守る社会資本の重要性や、中部地方整備局が行っている環境にも配慮した社会資本整備について、理解を得られたと感じている。

今後も積極的に広報活動を行い、港湾についての興味や、中部地方整備局の事業に対する理解を深めてもらうことが重要であると考えている。

謝辞：「海フェスタ東三河」での広報活動では、本局や名古屋港湾事務所、名古屋港湾空港技術調査事務所の職員の皆様にご協力をいただき、展示の説明や「清龍丸」、「白龍」の一般公開を行いました。ご協力いただいた多くの皆様へ、心からお礼を申し上げたく、謝辞に代えさせていただきます。

参考文献

- 1) 海フェスタ東三河実行委員会(2016)『この空と東三河の海が好き 海フェスタ東三河 2016.7.16[土]-7.31[日] 16日間の記録』、海フェスタ東三河実行委員会
- 2) 国土交通省「平成28年「海フェスタ」の開催地決定について」、http://www.mlit.go.jp/report/press/kaiji01_hh_000317.html (2017/5/15アクセス)
- 3) 農林水産省「平成28年漁業・養殖業生産統計」、http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/kaimen_gyosei/index.html (2017/5/15アクセス)